

I n a d o m i

d o u m e n

稲富・道免遺跡

共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

八女市文化財調査報告書 第121集

2017

八女市教育委員会

I n a d o m i

d o u m e n

稲富・道免遺跡

共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

八女市文化財調査報告書 第121集

2017

八女市教育委員会

序

本報告書は、八女市稲富に所在する稲富遺跡群の中で、共同住宅建設のため現地保存が困難となった部分について実施した発掘調査の報告です。調査面積は 800 m²と小さいですが、過去に実施された北隣接地の発掘調査と同様に、鎌倉時代や江戸時代と思われる集落跡の一部や土器等が発見され、稲富地区の中近世集落跡の状況が、わずかながらも明らかとなりました。

八女市の歴史を知る資料として、活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、文化財保護にご協力いただきました開発事業者の皆様、発掘作業員・整理作業員の皆様、および関係各位に改めて感謝申し上げます。

今後も、八女市の文化財保護行政にご理解とご協力をお願い申し上げます。

平成 29 年 12 月 28 日

八女市教育委員会

教育長 西島 民生

例 言

- ・ 本書は、共同住宅建設に先立ち株式会社 K&Y 代表取締役 川口直美氏（仲介：東建コーポレーション株式会社）の委託を受けて実施した、八女市稲富 240-1、241-1、242-3、243-2 所在の稲富・道免遺跡第 1 次調査の発掘調査報告書である。
- ・ 本報告の発掘調査は平成 28 年度に現地作業を行い、平成 29 年度は整理作業と報告書作成・刊行を行った。八女市教育委員会が調査主体となり、発掘調査（現地作業・整理作業・報告書作成刊行）は、八女市役所新社会推進部文化振興課の檀佳克が担当した。
- ・ 本書の遺構実測図は国土調査法第Ⅱ座標系（世界測地系）をもとに作成し、図面で示す方位は、全て座標北である。
- ・ 現地調査は平成 28 年 11 月から同年 12 月にかけて約 1 ヶ月間、檀および下記発掘作業員で実施した。発掘作業に当たっては季節外れの降雨等で極寒の悪条件の中、多大なるご協力のもと、円滑に発掘調査現場を運営することができた。ご芳名を記し感謝申し上げたい。また、本書で使用した遺構実測図は、檀が作成し製図した。
（発掘作業員）井上繁・太田黒邦夫・緒方和男・大淵博義・熊川雅士・熊野哲夫・野口邦男・篠原鐵郎・堀田武利（敬称略：50 音順）
- ・ 本書掲載の遺物実測図は、檀が作成し製図した。
- ・ 本書作成にあたり、出土品等について下記の方々からご教示を得た。記して感謝申し上げる。川述昭人（八女市岩戸山歴史文化交流館長）・岸本圭（九州国立博物館）（敬称略：順不同）
- ・ 調査図面・写真および出土遺物は八女市教育委員会（八女市役所新社会推進部文化振興課文化財保護係）で保管している。有効な活用を望む。

目 次

本文目次

1 調査の経緯と経過	1
2 稲富・道免遺跡の位置と環境（地理的環境・歴史的環境）	3
3 調査の方法と基本層序	5
4 出土遺構と出土遺物	7
5 総括	11

挿図目次

第 1 図 稲富・道免遺跡の位置	
第 2 図 稲富・道免遺跡の位置と近隣調査地 (S = 1 / 2,500)	
第 3 図 稲富・道免遺跡調査区全体図 (S = 1 / 500)	
第 4 図 稲富・道免遺跡 2 区全体図 (S = 1 / 200)	
第 5 図 稲富・道免遺跡 1 区全体図 (S = 1 / 200)	
第 6 図 稲富・道免遺跡 SD01 溝状遺構実測図 (S = 1 / 80)	
第 7 図 稲富・道免遺跡 1 区 1 号風倒木痕実測図 (S = 1 / 40)	
第 8 図 稲富・道免遺跡出土遺物実測図 (S = 1 / 2)	
第 9 図 稲富・道免遺跡と稲富・六反田遺跡の遺構位置関係 (S = 1 / 1,000)	

1 調査の経緯と経過

今回発掘調査を実施した稲富・道免遺跡は、福岡県八女市稲富字道免 240-1、241-1、242-3、243-2 に所在する。調査前は、畑地として利用されていた。

今回の調査は、当該地に共同住宅建設が計画されたことが発端である。平成 27 年 3 月 10 日に文化財保護法第 93 条 1 項に基づく届出および埋蔵文化財有無の確認の依頼があった。当該地では過去に埋蔵文化財の調査歴は無かったが、当該地北隣接地では過去に開発に伴って埋蔵文化財が発見され、平成 19 年度に記録保存のための発掘調査が実施されていた（稲富・五反田遺跡第 1 次調査）。

以上の状況から、当該地にも北隣接地と同様の埋蔵文化財が存在する可能性が高いことが予想された。よって、埋蔵文化財有無確認のための試掘・確認調査を平成 27 年 3 月 16 日に実施した（担当：八女市文化振興課文化財保護係 永田寧）。その結果、地表下約 40cm の表土層直下で溝状遺構・土坑等の遺構や、土器等の遺物の出土が確認され、当該地にも埋蔵文化財が存在する状況が明らかとなった。このことから、当該地における工事の掘削深度によっては発掘調査が必要となる可能性がある旨、事業者へ回答した（平成 27 年 4 月 10 日付け 27 八文文第 29 号）。

その後、建物基礎部分について工法確認を行ったところ、鋼管杭による施工が不可欠であるとのことであった。深い杭が入るため、遺跡への影響が大きいことから、埋蔵文化財の現地保存は困難な状況と判断された。

その後、事業者と協議のうえ、平成 28 年 11 月以降に住宅建設により削平を受ける箇所のみについて発掘調査を実施する方針となった。平成 28 年 10 月 14 日に事業者と発掘調査の覚書・協定書を締結し、住宅建設予定地の約 800㎡の現地発掘作業を平成 28 年度に、整理作業および報告書作成作業を平成 29 年度に実施することとなった。

八女市教育委員会では、平成 28 年 11 月 17 日付け 28 八文財第 605 号で県教育委員会へ発掘調査着手の報告（文化財保護法第 99 条第 1 項）をし、現地作業を平成 28 年 11 月 17 日から着手し、平成 28 年 12 月 22 日に完了した。

なお、発掘調査日誌から経過を抜粋すると、11 月 17 日から表土除去作業、12 月に入ってから遺構検出、12 月中旬に遺構掘削、図面記録作成を 12 月中旬～下旬に行っている。折からの降雨と人員不足により、調査は困難を極めた。

出土遺物は整理箱 1 箱分であった。平成 28 年 12 月 27 日に八女警察署に発見届（28 八文財第 651 号）および福岡県教育委員会に保管証（28 八文財第 652 号）を提出した。また、発掘作業の終了報告を県教育委員会に提出した（28 八文財第 653 号）。

その後、整理作業は平成 29 年 8 月から実施し、報告書作成作業を経て、本書を刊行した。発掘調査後、当該地には 2 棟の 2 階建ての集合住宅建設工事がなされ、平成 29 年 12 月現在は、共同住宅として利用されている。なお、調査当時の体制は、以下のとおりである。

【平成28年度】（現地作業および整理作業）

（調査委託）株式会社 K&Y 代表取締役 川口 直美

（仲介：東建コーポレーション株式会社）

（調査主体）

八女市教育委員会 教育長 西島 民生

（調査統括）

八女市新社会推進部文化振興課 文化財保護係

新社会推進部 部長 室園 哲也

文化振興課 課長 栗秋 克彦

文化振興課

文化財保護係 係長 中川 寿賀子

同 係員 永田 寧

同 檀 佳克（現地調査担当）

同 渡部 真弓

同嘱託 多賀 晴司

【平成29年度】（整理作業・報告書作成・刊行）

（調査委託）株式会社 K&Y 代表取締役 川口 直美

（調査主体）

八女市教育委員会 教育長 西島 民生

（調査統括）

八女市新社会推進部文化振興課 文化財保護係

新社会推進部 部長 松尾 一秋

文化振興課 課長 持丸 末喜

文化振興課

文化財保護係 係長 中川 寿賀子

同 係員 永田 寧

同 檀 佳克（整理・報告書担当）

同 渡部 真弓

同 甲斐 郁

同嘱託 多賀 晴司

2 稲富・道免遺跡の位置と環境（地理的環境・歴史的環境）

稲富・道免遺跡は、周知の埋蔵文化財包蔵地「稲富遺跡群」の北東端部分に位置する。旧八女市域に広がる平野部の中に位置し、北側の八女丘陵から南側の矢部川に向かって緩やかに下降しながら広がる沖積平野の中に位置している。

当該地周辺の歴史的環境であるが、発掘調査による考古資料は調査前段階では少なく、当該地北隣接地の稲富・六反田遺跡（平成19年度第1次調査：八女市文化財報告書第85集）が知られるのみであった。稲富・六反田遺跡では中世・近世の集落跡と思われる遺構・遺物が発見されており、中でも方形区画溝と掘立柱建物跡が存在し、12－13世紀の居館跡が想定されている。また、漆塗の布製品が井戸より出土している。また、西南西約500mには一竿遺跡や立野遺跡群があり、弥生時代の集落跡をはじめ、弥生時代以降の集落跡が多数発見されている。また、今回調査地の東側約200mには福島城跡の推定外堀があり、近世には福島城跡南半部に町屋が広がっており、今回調査地の近世は福島の町屋の西外れの箇所と思われる。

以上の周辺の状況から、本調査地では中世・近世の集落跡をはじめとして、弥生時代から中近世にかけての埋蔵文化財が発見される可能性が想定された。

なお、報告書作成中の平成29年度には、稲富・道免遺跡周辺では市道建設に伴って本調査地西側で試掘・確認調査を実施し、埋蔵文化財が発見された箇所について発掘調査が実施されている。詳細は発掘調査完了を待たなくてはならないが、本調査地や北隣接地の発掘調査で発見された中世集落跡の続きである可能性があり、周辺の中世の状況がさらに明らかになることが期待される。

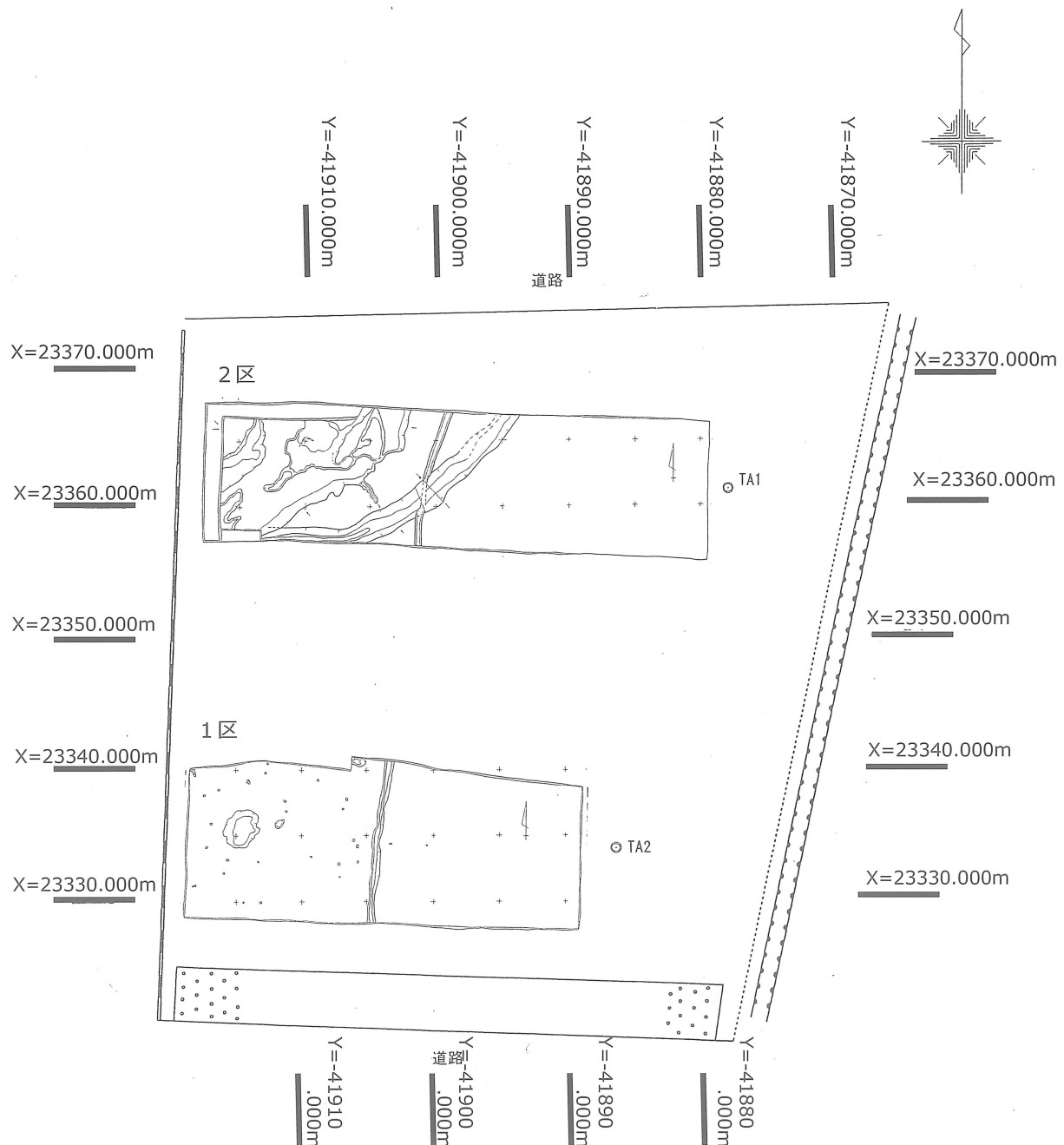
現段階では、稲富遺跡群の各時代集落の状況は断片的でもあり、今後調査事例の増加により、遺跡の状況は徐々に明らかになっていくものと思われる。稲富遺跡群の中世以前に関しては文献資料も無く、埋蔵文化財が唯一の資料であり、今後も周辺での開発には細心の注意を要することを付記しておきたい。



第1図 稲富・道免遺跡の位置



第2図 稲富・道免遺跡の位置と近隣調査地 (S = 1 / 2,500)

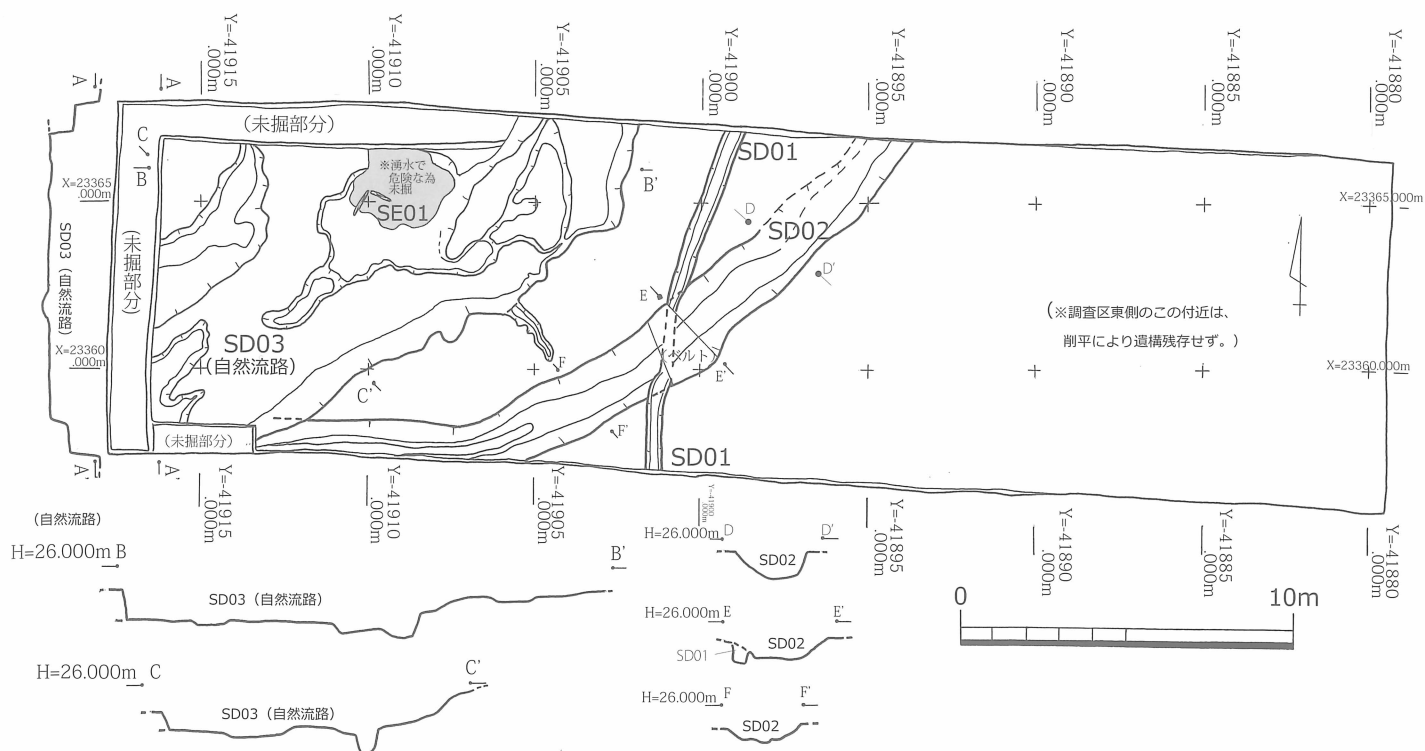


第3図 稲富・道免遺跡調査区全体図 (S = 1 / 500)

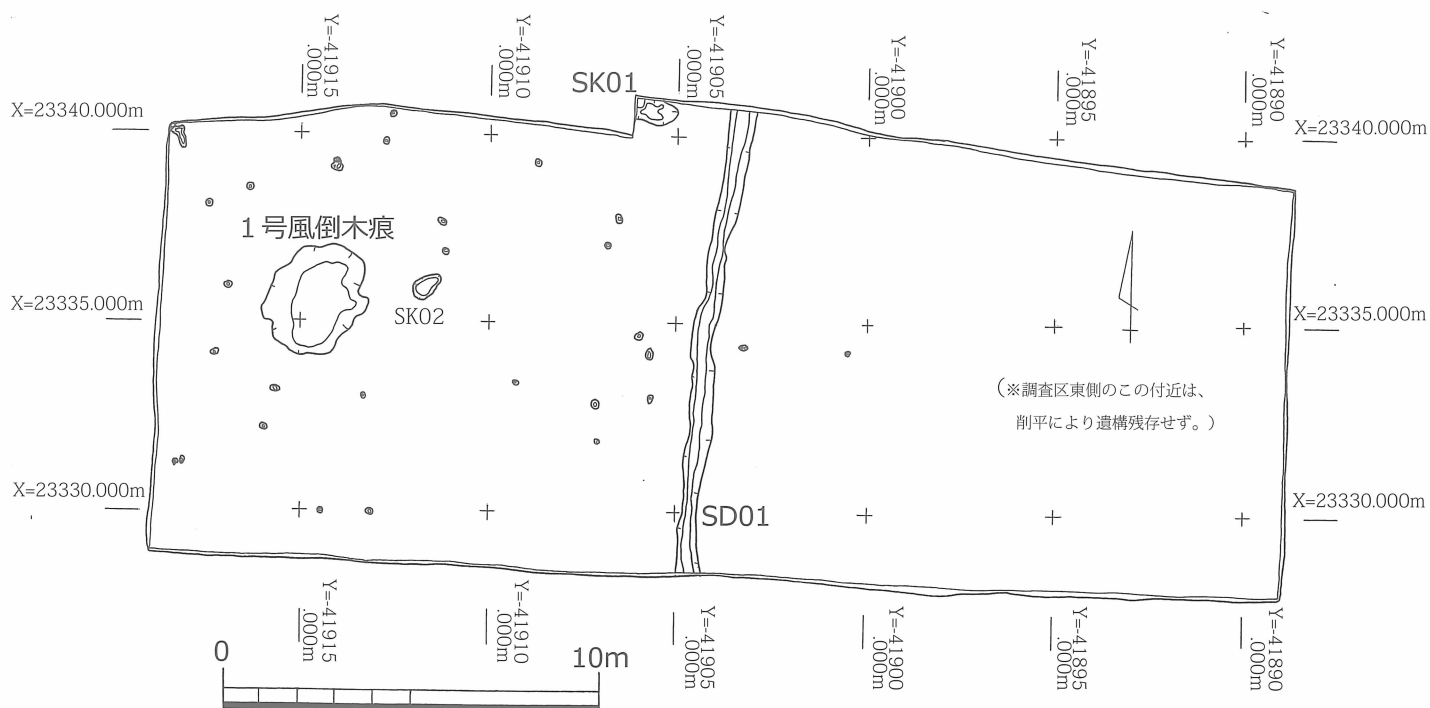
3 調査の方法と基本層序

調査では、建物建設により遺跡の現地保存が困難となった箇所のみについて発掘調査を実施した。調査の都合上、2棟ある建物個所の南棟部分を1区、北棟部分を2区と命名して調査を実施した。

発掘作業では、重機により表土除去後、人力で掘削・精査をした。表土を除去した状態で、既に包含層および当時の生活面は過去の削平により消失している状況であり、表土直下（地表下約40cm）で遺構面が確認された。また、南北方向に排水用暗渠と思われる幅20cmの攪乱が、調査地全体に2.5m間隔で存在していた。



第4図 稲富・道免遺跡2区全体図 (S = 1 / 200)



第5図 稲富・道免遺跡1区全体図 (S = 1 / 200)

基本土層は表土層（地表面～地表下約30cm）の直下で遺構検出面となる黄褐色粘土層が検出された。その面で、柱穴や土坑、溝状遺構等の遺構が検出された。それより下層では攪乱や遺構掘削時等に数か所で確認作業を行なったが、無遺物であり遺構は確認できなかったため無遺物層と判断し、遺構検出面とした黄褐色土層までの発掘調査を実施している。

当該地では、遺物包含層はおろか当時の旧地表面も残存していない状況であり、著しい削平を受けていて、遺跡の残存状況は決して良好とは言えず、特に調査区東半部分は遺構も残存しないほどの削平を受けている可能性が高い。ただし、西半部については全面的に遺構が散在していることから、本来存在した遺構数に近い数が残存している状況と思われる。

なお、調査2区の西側部分には自然流路が存在し、流路内では井戸跡1（SE01）も検出されたが、掘削深度が地表下2mより下位に達することや、隣接地に集合住宅がある点等から、調査のための掘削は人命にかかわる恐れがあり危険と判断した。この井戸に関しては、今回調査の契機となった集合住宅建設工事の計画と照らしても、十分な保護層確保のうえ遺構は現地保存が可能であるため、井戸については上面検出に留め、本調査での掘削を見送ったことを付記しておく。

4 出土遺構と出土遺物

遺構は、1区・2区ともに調査区の西半部分を中心に発見され、東半部分はもともと旧地形が高かったためか、完全に削平を受けている状況であった。

検出された遺構は、ピット遺構（P）、溝状遺構および自然流路（SD）、井戸（SE）のほか、風倒木痕1が検出された。また、遺物も削平を受けていることに起因するが、ごくわずかであった。

以下に、遺構・遺物の概要について記す。

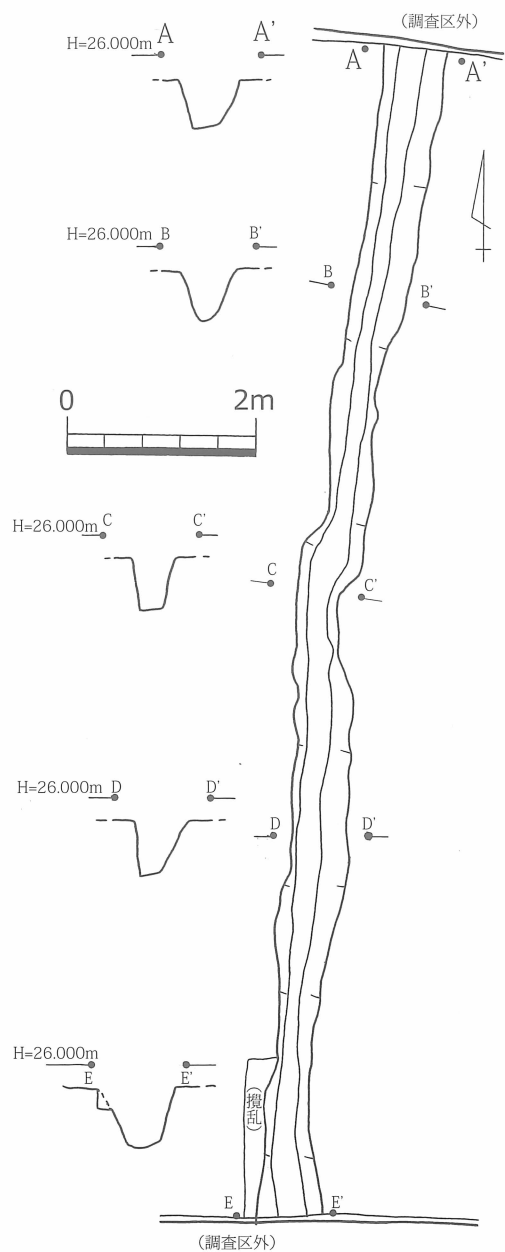
①ピット状遺構（第4・5図）

ピット遺構は、柱穴となる可能性が高いものも多く確認され、発掘作業時も建物跡や柵列等の可能性を精査しつつ検討したが、削平を受けていることもあり明確にできるものは確認できなかった。調査範囲の制約もあるため、今後の調査区隣接地の調査時に併せて、今後検討する必要があると思われる。

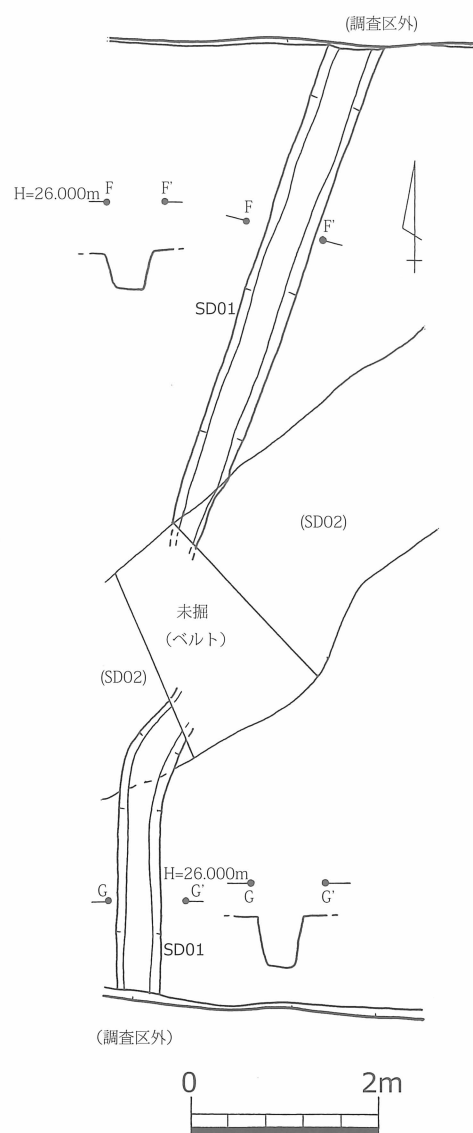
②溝状遺構（SD）（第4～6図・第8図）

溝状遺構は、調査1区で1条（SD01）、調査2区でSD01の続きと、後述する自然流路（SD03）に並走する形で溝状遺構が1条（SD02）検出された。今回の調査区内では、2条の溝状遺構が検出された。

1 区SD01



2 区SD01



第6図 稲富・道免遺跡 SD01 溝状遺構実測図 (S = 1 / 80)

SD01 は、概ね南北方向に延びる、幅が狭く深い溝状遺構である。覆土には暗褐色土層が入るものの、水性堆積と思われるような砂層や粘土層は確認されず、人為的に埋められた可能性が高いと思われるほど単一土層であった。また、溝底面の高低差も片方に向かって傾斜がある状況ではなく、どちらかに水を流す機能も、現地観察では確認できなかった。この覆土の状況や遺構底面形状等から、SD01 は空堀であった可能性が高いと思われた。SD01 は、一部で屈曲する箇所もあるが、概ね南北方向に直線的に伸びている。これらの状況から、SD01 は集落内区画として機能する溝であった可能性が高いと思われる。

なお、出土遺物は精査したが、現地で破碎してしまう状況の土師器微細片が数点出土したのみであった。北隣接の稲富・六反田遺跡でも同様の区画溝が発見されていることから、SD01 の時期は中世に属する可能性が高いと思われるが、近世に降る可能性もある。

SD02 は、後述する SD03 自然流路の南側に並走するような形で、北東－南西方向にのびる、断面逆蒲鉾状の形状をした溝状遺構である。覆土の下層では部分的に川砂層の堆積も確認されたことから、流路として機能していた可能性が高いと思われる。

遺物は、土師器や瓦質土器・陶磁器の小片が数点出土している。図化できたものを第 8 図に示した。第 8 図 2 は瓦質の鉢片、第 8 図 3 は外面に鉄釉状の釉が付着する陶器片である。2 は中世に属する可能性が高く、3 は近世に属する可能性が高い。このことから、SD02 は中世まで遡る可能性は完全に否定できないが、近世に流路として機能していた水路である可能性が高いと思われる。

③自然流路 (SD) (第 4 図)

SD02 自然流路は、調査 2 区の西端で、屈曲しながら北東－南西に延びる方向で検出された。調査区内では南側の岸が段丘上に上がる状況で検出され、底面も不整形な形状をしていることから、自然流路と判断した。

掘削の当初から自然流路と判断されたため、調査の都合上、SD03 の掘削の大半は重機により行ったが、SD03 の覆土では黒褐色土層と粘土層が互層に入る状況が確認され、最下層付近では多くの木質片の出土が確認された。なお、木質片も調査時に精査したが、人為的加工痕跡が確認されるものはなく、全て洪水等による流木と判断された。

遺物も、土器片や陶器片が数点確認されたのみである。出土遺物に陶磁器が混入することから、埋没の時期は近世に降る可能性が高いものと思われる。

なお、平成 19 年度に調査地北隣接地で調査された稲富・六反田遺跡第 1 次調査で検出された SD01 溝状遺構が、位置関係等から稲富・道免遺跡 SD03 自然流路と同一遺構である可能性が極めて高いことも、今回の発掘調査で判明した。

④井戸 (SE) (第 4 図)

前述した調査 2 区内の SD03 自然流路内北側で、木片と共に湧水のある黒褐色土が自然流路より深く落ち込む箇所があり、状況から井戸 1 基が存在するものと思われた。

ただし、遺構検出面が地表下約 2 m に近く、常に湧水があり、調査時の降雨等もあっ

て、周辺の土が常に崩壊を繰り返す状況であった。北側には現在も使われている用水路や道路もあり、西側には2階建ての共同住宅もあるため、掘削には相当の危険が伴う状況であった。また、本調査の契機となっている共同住宅建設に伴う鋼管杭が一部入る可能性はあるものの、今回の住宅建設工事後もこの井戸に関しては深度もあるため、現地に残る公算が高かった。これらの状況から、本調査での掘削は人命にかかわると判断し掘削を行っていない。発掘調査時には、平面四角に板が組んであるかのような木材の出土状況が確認され、詳細は不明であるが近世の所産と思われる。

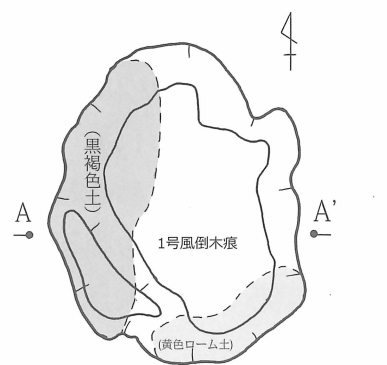
⑤土坑 (SK)

土坑と思われる遺構は、調査1区で2箇所検出された(SK01・SK02)。ともに径1m程度の楕円形の形状である。覆土は黒ボク由来の黒褐色土層であり、特に分層もできないため、人為的に埋められたものと思われる。焼土や炭粒もごく少量の混入が認められる程度であった。

遺物はSK01より土器小片2点が出土したのみであり、うち1片は内外面丹塗りの甕の口縁部片であり、弥生時代中期に属する(第8図1)。もう1辺は小片であるが、土師器片であることから、SK01の時期は古代～中世に属する可能性が高いと思われ、SK02も同様と思われる。

⑥風倒木痕

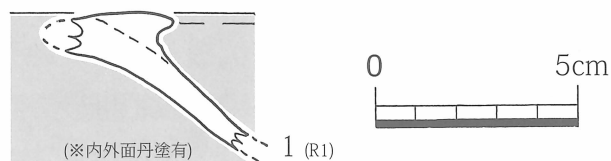
調査1区の西端部で検出された。検出面では西側に黒褐色土層、南東側に黄色ローム層があり、西側から南東側に向かって下の土層がみられる。この状況や掘削時の観察から、当該風倒木は北西方向に向かって木が倒れたものと思われる。遺物等の出土もなく、風倒木痕なので時期決定は困難であるが、黒ボク土由来の黒褐色土層が存在する点を考慮すると、倒木の時期は弥生時代以降であるものと思われる。



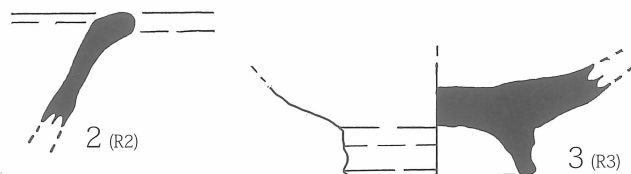
(土層注記)
 1…Hue10YR2/3 黒褐色土層しまり弱、柔らかい(黒ボクと同)。
 2…Hue10YR3/4 黄褐色土層。(遺構検出面と同層)。
 3…Hue10YR6/6 黄色ローム土層。ややしまり有、柔らかい。
 4…Hue10YR4/4 黄色ローム土層(3の下層のローム土)。



第7図 稲富・道免遺跡1区
 1号風倒木痕実測図
 (S = 1 / 40)



(1区SK01)
 (2区SD02)



第8図 稲富・道免遺跡出土遺物実測図
 (S = 1 / 2)

5 総括

最後に、今回の発掘調査成果について総括したい。

稲富・道免遺跡は、八女市の西部に所在する稲富地区の集落北東に位置する。今回、集合住宅建設が予定され、試掘・確認調査の結果、中世と思われる遺構・遺物が発見された。平成19年度の当該地北隣接の店舗建設に際しても中世・近世の集落跡が発見され発掘調査が実施されており(稲富・六反田遺跡第1次調査)、稲富・道免遺跡でも同様の集落跡が発見される可能性が高いと判断された。このため、工事に先立ち建物建設で掘削がなされる範囲のみを対象として、平成28年度に約1ヵ月間の期間で発掘調査を実施した。

発掘調査の結果、遺物包含層や中世当時の地面は削平のため残存していない状況であり、当初の想定ほど遺跡の残存状況は良好ではなかった。しかし、調査区西半部を中心に、表土層直下で柱穴と思われるピットや土坑、溝状遺構、井戸の他、自然流路1条と風倒木痕1が検出された。これらの遺構は、出土遺物がごく少ないため時期特定はやや困難であるが、北隣接の稲富・六反田遺跡第1次調査と同様に、中世～近世の集落跡の一部と判断される。

今回の調査成果のひとつとして、平成19年度の稲富・六反田遺跡で発見されていたSD01溝状遺構が、今回の稲富・道免遺跡発掘調査の北側で北東－南西方向に流れる自然流路の一部であったと判明したことは、大きな成果であった。

加えて、本調査と稲富・六反田遺跡発掘調査時の状況と比較すると、今回の稲富・道免遺跡調査地の遺構数は明らかに少ない状況である（第9図）。また、稲富・六反田遺跡では井戸の集中する箇所があり、井戸周辺に区画溝や柱穴等の遺構が集中する傾向がみられる。

また、遺構に直接伴うものではないが、SK01 土坑の中からは弥生時代中期の土器小片も出土した。このことから、稲富地域周辺にも弥生時代中期の集落跡が存在し、近隣に残存している可能性もあり、稲富遺跡群の集落等の存続時期や消長を考えるうえで貴重な発見であった。

大局を見れば、本調査で発見された自然流路（SD03）から南側で遺構が減少する傾向がみられるものの、柱穴と思われるピットや区画溝と思われる溝状遺構は存在するので、稲富・道免遺跡調査地も集落域の一部であることは疑いない。集落遺跡の状況は今後の発掘調査事例の増加を待たなければ明確ではないが、遺構密度の状況から、稲富・道免遺跡で検出された集落遺構は、稲富・六反田遺跡発掘調査で発見された集落跡の一部で、集落の中心部は稲富・六反田遺跡調査地付近であり、稲富・道免遺跡発掘調査地は集落の南端部付近に位置するものと思われる。

今回の発掘調査は稲富遺跡群に存在する中世～近世集落の一部分に過ぎない。よって、集落の状況も一部のみ判明している状況で、未だ不明な点も多い。今後、近隣地での調査事例を繋ぐことで、古文書や文献等にも記載のない中世集落の状況が徐々に明らかとなるであろう。折しも、平成29年度は本調査区西側で市道建設に伴い中世と思われる遺構が調査中であり、本調査の成果と併せることで稲富遺跡群中世集落の実態が一段と明らかとなることが期待される。今後とも、開発等に伴い遺跡の保存が困難な場合の地道な記録保存を行い、さらにその調査成果を併せて検討・検証し、地域史の復元を試みる積み重ね作業が重要であると痛感する発掘調査事例であった。

【参考文献】

赤崎敏男編 2009 『稲富・六反田遺跡』 八女市文化財調査報告書第85集
八女市教育委員会



第9図 稲富・道免遺跡と稲富・六反田遺跡の遺構位置関係 (S = 1 / 1,000)

圖 版



調査前風景および表土除去風景（南東より）



1区表土除去後（南西より）



1区西半部分検出状況（南東より）



1区 SD01 検出状況（南より）



1区 SK01 検出状況



1号風倒木痕検出状況（西より）



同 左



稲富・道免遺跡発掘調査区全景（上空より・上が北）



稲富・道免遺跡調査区（西上空より）



稲富・道免遺跡調査区（東上空より）



稲富・道免遺跡 2 区 SD02 (北東より)



稲富・道免遺跡 2 区 SD01・02 (南より)



稲富・道免遺跡 2 区 (北西より)



稲富・道免遺跡 2 区 SD03 (南西より)



稲富・道免遺跡 2 区 SD01 (南より)



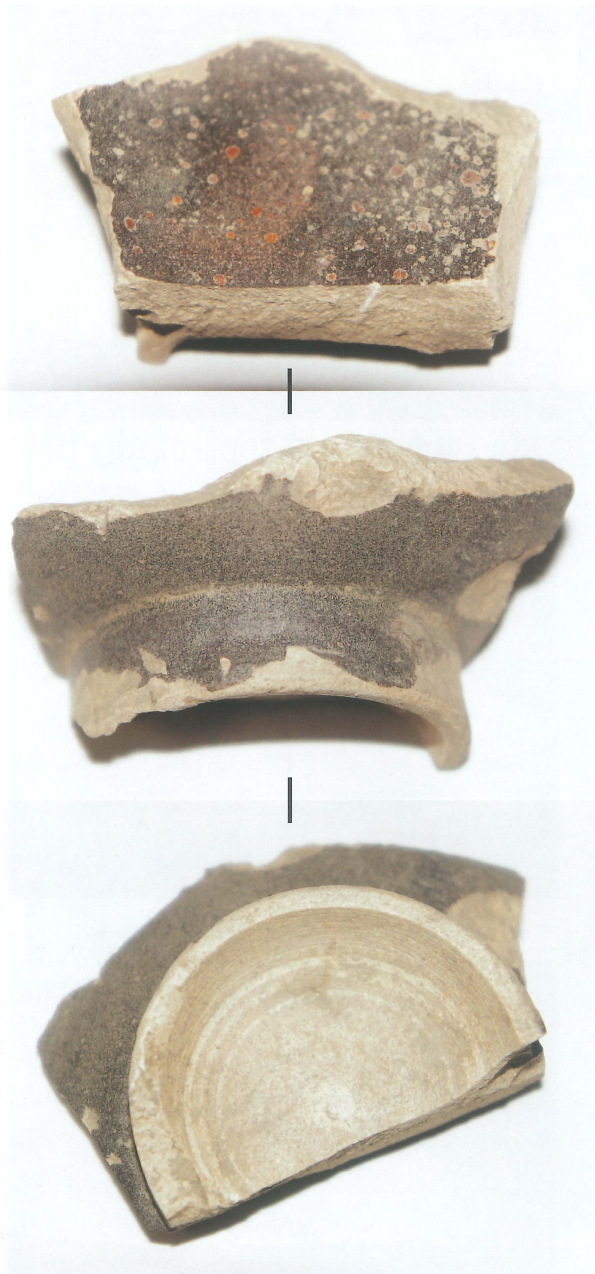
稲富・道免遺跡 2 区 SE01井戸検出状況



稲富・道免遺跡 1 区西半遺構検出状況 (北より)



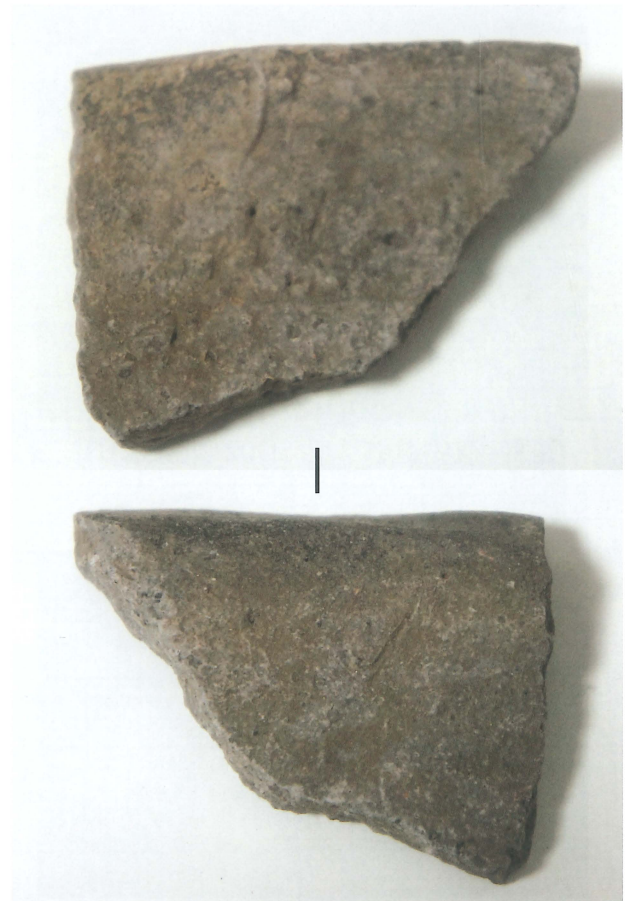
稲富・道免遺跡 1 区 SD01 (北より)



稲富・道免遺跡2区 SD02出土土器 (第 8 図 3)



稲富・道免遺跡1区 SK01出土土器



稲富・道免遺跡2区 SD02出土土器 (第 8 図 2)



稲富・道免遺跡2区 SD02出土土器



稲富・道免遺跡2区 SD03出土土器

報告書抄録

ふりがな	いなどみ・どうめんいせき								
書名	稲富・道免遺跡								
副書名	共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書								
巻次									
シリーズ名	八女市文化財調査報告書								
シリーズ号	第121集								
編著者名	檀 佳克（だん よしかつ）								
編集機関	八女市教育委員会								
所在地	〒834-8585 福岡県八女市本町647 TEL. 0943-23-1982 FAX. 0943-24-4331								
発行年月日	西暦 2017年12月28日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因	
		市町村	遺跡番号						
いなどみ・どうめんいせき 稲富・道免遺跡 （稲富遺跡群）	ふくおかけんやめし 福岡県八女市 いなどみ 稲富 240-1、241-1、 242-3、243-2	402109	405016	33° 12' 35"	130° 33' 02"	20161117 ～ 20161222	約800㎡	共同住宅 建設	
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項	
稲富・道免遺跡 （稲富遺跡群）	集落跡	鎌倉時代		柱穴・土坑・井戸・ 溝状遺構・自然流路		土師器・須恵器・陶器			
要約	共同住宅建設に伴い発掘調査を実施した稲富・道免遺跡に関する報告である。 今回の発掘調査では、北隣接地の稲富・六反田遺跡発掘調査（八女市文化財報告書第85集）と同一集落跡と思われる柱穴や溝状遺構・井戸等が検出された。 また、自然流路が発見され、稲富六反田遺跡で検出されていた溝状遺構（SD01）は、今回検出した自然流路の一部であることが確認された。本調査地は前回の稲富・六反田遺跡調査時よりも遺構・遺物量は少なく、今回検出された自然流露より北側が遺跡の中心部となる状況が類推された。 稲富・六反田遺跡調査に続いて本調査成果により、集落跡の状況が徐々に明らかとなってきた。今後周辺での事例が増加することにより、稲富遺跡群中世集落の様相が明らかとなっていくことが期待される。								

※座標は世界測地系による。国土地理院ホームページの地図検索システムより得たものであり、基準点測量によって得た値ではない。

稲富・道免遺跡

八女市文化財調査報告書
第121集

平成29年12月28日

発行 八女市教育委員会
八女市本町647
印刷 (株) 東兄弟
八女市祈祷院563